

# 一五年戦争末期の雑誌 (三)

——少国民文化協会の出版物——

## 山 本 明

I

少国民文化協会とは、一九四一年一二月二三日、太平洋戦争開始の一五日後の皇太子誕生日に、九段の軍人会館で創立大会が開催された国策統制団体である。なお、発会式は翌四二年二月一日の紀元節に東条首相も臨席して盛大に行われた。

この協会は左図のように一の分科会から構成されている。



四、紙芝居部会  
 第一分科 銀頭紙芝居  
 第二分科 教育紙芝居

第五分科 歴史地理読物  
 第三分科 童話文学  
 第四分科 少年文学 (少女文学ヲ含ム)  
 第六分科 科学読物

第七分科 翻訳文学

第八分科 専門劇

第九分科 学校劇

第十分科 童画

第十一分科 漫画

第十二分科 其の他 (図案・背景・映画・漫画等)

### 一五年戦争末期の雑誌(三)

八、出版部会

九、音楽部会

一〇、映画部会

一一、蓄音器レコード部会

それは既存の文化団体、統制団体、業界団体を一つにまとめたもので、その性格は複雑であった。協会の定款の「目的及び事業」として、次の項目が列挙されているのを見ても、その権限の大きさが分かるというものである。協会の目的は、「皇國の道に則り国民文化の基礎たる日本少国民文化を確立し以て皇國民の鍛成に資する」ことであり、事業として次の二項目をあげている。

一、日本少国民観の確立並に日本少国民文化の fundamental 究明

二、日本少国民文化政策の樹立並に遂行に対する協力

三、内外の少国民文化の研究調査

四、少国民文化財の生産、配給に関する企画指導並に斡旋

五、少国民文化財生産者の再教育並に養成指導

六、優良少国民文化財の奨励並に普及

七、少国民文化各部門の交流に関する研究並に調査

八、地域的特殊性に適応する少国民文化の育成指導

九、少国民生活に交渉ある他団体との連絡及び輔導

一〇、少国民文化労者及少国民文化生産労者の表彰

一一、其他必要と認むる事業

ところが、一九四四年の東京の空襲と壊滅で、協会は学童集団疎開の慰問団派遣センター的なものとなり、雑誌の発行も一九四

四年一二月号以後は休刊したまま、敗戦をむかえることになる。その後、協会は戦争協力していないから存続できるのではないかという希望的観測さえあつたほどで、占領軍が統制団体の延命は許さないということが分って、十月頃に、一片の声明もださずにいつしか解消した。創立大会や発会式のはなやかさに比して、その末路のあわれなことか。しかし、そのあわれさは、山中恒が「ボクラ少国民」の第三部『撃チテシ止マム』で指摘しているように、児童文学者の戦争協力についての「うしろめたさ」とセットになつてゐるのであり、自己批判なしに「戦後」になだれをうつて逃走する準備だったのである。

そういう事情もあって、今日にいたるまで、少国民文化協会については、基本的資料もわずかしか復刻されていないし、回顧録も少ない。たとえば、二反長半の『児童文学の展望』(一九七三年、大阪教育図書刊)も、戦争中については「アウトライン」を記しているにすぎない。その二反長の著書について関英雄は、「これを読むと太平洋戦中の児童文学についてあれこれ書いている中に、自分だけは戦争を謳歌せず、自由主義者を通したように書いていて、戦争協力的な姿勢で書いた自身の著書はその書名も出てこないので呆れた」と告発した『体験的児童文学史』後編、(一九八四年、理論社刊)を刊行して、ようやく、牛小屋の闇から牛をひきだす氣運がでてきたようである。

ここでは、少国民文化協会の機関誌二誌の目次を中心にして、とりあえず文献的資料だけを明らかにしておこう。

(註)

少国民文化協会についての戦後に書かれた文章を年次順に記録しておこう。

(1) 豊野省三、菅忠道、熊谷孝、関英雄、巖谷栄二編『日本児童文学大系』第四卷「少国民文学への転向」(一九五五年、三一書房刊)

(2) 菅忠道『日本の児童文学』(初版は一九五六年、大月書店刊)

(3) 鳥越信『日本少国民文化協会について』(『文学』一九六一年八月号所収)なお、同論文はのちに鳥越信『日本児童文学史研究』II、風濱社、一九七六年刊に収録。

(4) 二反長平『児童文学の展望』(大阪教育図書、一九六九年刊)

(5) 山中恒「日本少国民文化協会」(『辺境』第二次第二号(一九七四年六月)、第二次第三号(一九七五年四月)所収。のちに加筆して『撃チテシ止マム』(『ボカラ少国民』第三部、辺境社、一九七七年刊)に収録

(6) 関英雄『体験的児童文学史』後編(理論社、一九八四年刊)『日本児童文学』一九八二年四月号から一九八四年一一月号に連載したものを補筆添削して一本にまとめたもの)

## II

日本少国民文化協会の歴史は、ふつう、一九三八年一〇月に内務省警保局図書課が発表した「児童読物改善ニ関スル指示要綱」を出発点に置くことになっている。

「要綱」にはじまるという説は、まず波多野完治「児童文化の理念と体制」(『児童文化論』岩波書店、一九四一年一月刊)を嚆矢とする。同じ題旨は、同氏の「児童文化構造論」(『児童文化』上巻(西村書店、一九四一年二月刊所収)にも書かれている。すなわち、「児童文化が問題になり出したのは他の所でも書いたやうに支那事変以後、日本が自己の使命の偉大さに気づき、これがために後代に期待する感情をおこしてからである。昭和一三年内務省の児童読物浄化運動以後の児童文化政策は専らこの国家的見地に立脚して樹立されて居る。これは誠に然るべきことであつて、この道によつてのみ始めて、日本の児童文化は正しい向上に期待することが出来るのである」。

つづいて、情報局編集『週報』二五三号(一九四一年八月一三日号)所収の「児童文化の新出発——日本児童文化協会成立について」は、次のように書いている。なお、ここで「日本児童文化協会」とは、のちに山本有三の提案によって「日本少国民文化協会」に改名することになる。

「昭和十三年の、春「秋のミス。編者」内務省では、このやうな児童読物が、日本国民の育成に大きな悪影響を齎すことをおそれて、出版業者と編輯者に善処を要望する一方、三十余種の漫画、絵本を禁止、削除した。しかし根本的に改善するためには、一定の指導方針を確立することが必要なので、民間文化人の協力を求めて指導要綱を作り、今後の児童読物はこの指導要綱によることにし、一方、出版業者、編輯者と連絡し指導する

## 一五年戦争末期の雑誌(三)

ために、『日本児童絵本出版協会』、『関西児童絵本卸業協会』、『青葉会』を設け、また民間側もこれに呼応して『日本児童漫画家協会』、『少年作家画家協会』などを設立したが、長い年月にわたつて當利本位に馴れた業者と、業者の意のまゝに作品を作つて来た作家画家達は、この淨化指導の方針を具体化するだけの力もなく、更に積極的な指導方針の必要が痛感されたのである。

昭和十四年五月に文部省では、今までの図書推薦制度を拡大して、児童図書の推薦を始めた。この制度は、両親とか教師が図書を選択するには、大変に便利であるが、その対象が既に出版された図書に限られてゐる所に限度がある。結局、内務省の検閲、文部省の推薦だけでは、児童図書を、根本的に改善するには不十分といふことになつた。

改善を要するものは単に児童図書に限らない。玩具、紙芝居、映画、演劇、音楽、舞踊等についても同様である。これらのは相互に關係があり、互に影響し合ふものであるから、個別的に改善することは出来ない。例へば、紙芝居は映画物語、童話から取材し、小玩具はプロマイド、読物から取材し、また、逆に読物は映画から取材してゐるといつた有様で、これに対する取締りや、指導は一元的でない憾みがある。

このやうに指導するものとされるものとの両面の不統一を強力に一元化しようといふ要望は次第に識者の間に高まつて來た。そして遂に昭和十五年の秋に発足した大政翼賛会によつて

とり上げられ、『日本児童文化協会創立準備委員会』が昨年十二月に設けられ、民間から選ばれた児童文化の権威者十氏によつて一応『日本児童文化協会要綱案』が作られた。その後、本協会設立に関する事務は主に情報局で扱ふことになり、同局の斡旋で、文部省を初め厚生、内務、商工の各省、警視庁等の関係官庁の協議会が七回に亘つて開かれ、要綱案を検討して修正を加へ、去る六月十日、民間側の創立準備委員の參集を求めて、右の正案を十分に審議し、『日本児童文化協会設立要綱案』の最終的な決定を見たのである。

さらだ、この「要綱」の作成に力のあつた内務省警保局検閲課の佐伯郁郎は『新児童文化』第四号(一九四二年五月刊)所収の「少国民文化協会の設立まで」での説をオーソライズし、のちに若干の加筆訂正のうえ『少国民文化をめぐって』(一九四三年一月、日本出版社刊)に再録している。

内務省の発案ではじまる出版物「改善」計画が、一九四〇年秋には、大政翼賛会によつて関係官庁の連絡によつて、一大機關にまとまることになり、内務省の手をはなれて、情報局の所管となる。

こうして、上からの「指導」と、下からの「バスに乗りおくれるな」とが一致して、日本少国民文化協会が、「文化」のジャンルを網羅して、前述の「どく一一部会」によって構成されて発足することになつた。

この部会名を眺めるだけでも、さまざまの思惑が雜煮のように

まじっていることが分る。「新体制」の掛声で自主的な団体をあわてて解消して統合されたもの、たとえば文学部会もあれば、すでに企業統制で整理されていくつかの関係企業があわてて部会となつたもの、たとえば映画部会、蓄音器レコード部会もあり、小企業、個人営業の紙芝居屋がそつくりそのまま紙芝居部会になつたものなど、色とりどりであつた。職業上の必要性から入会しないと糊口がすすげないものもあれば、文学部会、演劇部会の部員の一部のよう、生産力理論の觀點から少国民の保護・育成を目的とするものや、小川未明のように文化には国家的政策が必要だと考えて社会民主主義から無自覺にファシストになつた人までがいた。

それその疑惑が、「このさい国家の力でなにかが出来るのではないか」という期待となって、ここに集つた観がある。

この時代に「少国民」だった私にとっては、「新体制」も「太東亜戦争」も、うれしいプレゼントではなかつた。小学校が国民学校に變つて（一九四一年四月、学校が「練成の場」）になつてしまつたし、放課後の時間は「大日本青少年団」に組み込まれて、遊びながら登下校することは禁じられて、列を組まねばならなかつた。また、運動会は分行進が中心行事となり、食べざかりの子供はおやつはもちろん、主食も不足がちになつた。ボールは貴重品で、戦争初期には、ときたま学校で配給があつたけれども、十人に一人の割合で、とても足りなかつたし、弾力性のない粗悪なゴムで、すぐに割れたり、穴があいたりで使用不可能になつた。

その上、日本少国民文化協会は、子供の遊びや読書から、「面白さ」とか「楽しさ」という要素を奪いとつてしまつた。前述した内務省の「指示要綱」が少国民文化協会の母体だたという説は、そのかぎりでは、充分に説得力がある。『少年俱楽部』の魅力が目に見えて減少した事実を想起せよ。ともかく、少国民文化協会の仕事は、私たち少国民にとって迷惑でしかなかつたのであつた。

この少国民文化協会の活動については、今にいたるも完全な総括は行われていないし、そのための資料も揃つてはいない。私はとりあえず、『新兒童文化』『少国民文化』『少国民文学』および、協会編集なしし刊行の図書に目を通すことができたので、その目次を提示することにした。

そのための簡単な解説を付すことにしておこう。

『少国民文化』一九四二年六月に創刊された協会の中央機関誌。月刊で一九四四年一二月号まで刊行され、休刊となつた。全三〇冊が発行された。

なお、『少国民文化』は、当時、新しい雑誌の発刊が禁止されていたので、『新兒童文化』（一九四〇年創刊の兒童文化総合誌）を「献納」させて創刊された。『新兒童文化』は季刊誌で、有光社発行、異聖歌編集の高級誌である。この雑誌は、「戦争下の『夕映え復興』を集中的に反映したアクチーヴでモニユメンタルな運動誌であったという存在意味」（関秀雄『体験的兒童文学史』後編）があつた。その内容は、後に目次を提示しておく。創

刊号から四冊發行されて、『少国民文化』創刊の一ヵ月前に停刊となつた。

『少国民文学』 一九四三年五月に創刊された協会文学部会の機関誌。八月号から『少国民文化』に統合された。わずか三号の生命であつた。編集は少文協文学部会で、発行は東苑書房である。編集は、吉田甲子太郎と二反長半。二反長半の『児童文学の展望』（一九六九年刊）に、『少国民文学』について、次のような文章がある。

「（少国民文化協会文学部会に）私はさいしょから関係してい る。今から見ればよくもあんなことが言えたと思うようなことを勝手気ままに放言し、手中にある『少国民文学』は、ある程度の時局色を盛ったほかは、自由な立場での芸術至上的なもの を依頼しけいさいした。戦時といえども児童の情操涵養は、芸術である。この線でレジスタンスした。」

当時の「少国民」だった私にとっては、こういう「芸術」論で面白くもない本しか与えられなかつた恨みを忘れることができない。この文章の「レジスタンス」概念の乱用には、私はあざんとするばかりである。

自己の文学を守るたてであつたともいえないこともない。……もし、このことを抵抗ということばにおきかえて考えてみるとらば、その強さの故でなく、弱さの故に、若干の抵抗を結果したというそのことに、問題がありはしないか。

右の文章に、管は「この言葉は、戦時下の児童文学における芸術的抵抗の意味と役割の本質を、自己批判をこめて語られたものとして、重要な意味をもつてゐる」とコメントを付している。ここには、二反長半とは全く異質の反省があつて、今日の児童文学にも充分通用する思想があるといえる。今日、われわれが日本少国民文化協会を論じるときには、最小限こうした考え方をふまえておかないと意味がないのである。

### III

少国民文化協会編集の単行本は、協会が存在した四年八ヵ月の間に、四冊刊行された。少国民文化協会に密接に関係している単行本は他にもあるけれど、（たとえば、佐伯郁郎『少国民文化をめぐって』（一九四三年一月、日本出版社刊））ここでは少国民文化協会編集のものだけを、記録しておこう。

- (1) 『九軍神の御靈に捧ぐ——少国民作品集』（一九四三年六月、童話春秋社刊）

いわゆる「芸術的抵抗」について、管忠道は『日本の児童文學』の中で、塚原健二郎の文章を引用している。その文章は次のようなものだ。

「童話は、その弱さの故に、戦局の苛烈化とともに、存在さえ否定されるようになつたが、作家側からいえば、その弱さこそ、

一九四二年夏に、少国民文化協会、軍事保護院、陸軍省、海軍省、情報局、文部省が、「特別攻撃隊九勇士の御靈に捧げる綴方」および「かうして出征家族（遺族）のお役に立つた」とい

う題の作文募集を行なったところ一万八千余名の応募があり、そのなかから一二六編の優秀作を選出して発表した。本書はそこのうちの九七編を収録している。

(2)『少国民詩・年刊I』(一九四四年二月五日、帝国教育出版部刊)

本書は少国民文化協会文学部会の詩分科に属する会員全員から一九四二年中に執筆、発表した作品を提出してもらひ、そこから選出した三八人の四一篇の詩を収録している。巻頭の北原白秋の詩をはじめ、聖戦讀美、日本は神國也の詩がほとんどあるが、萩原朔太郎、藪田義雄、室生犀星、村野四郎の詩だけが、戦争と無関係である。目次を記録しておく。

「浅間丸」外二編(北原白秋)、「貞」(萩原朔太郎)、「本のネジ」外二編(佐藤惣之助)、「梓武天皇」(雲聖歌)、「日本」(丸山薫)、「美しい国」(阪本越郎)、「二重橋前で」(八十島稔)、「蝦夷」(及川甚喜)、「床の間」(稻葉健吉)、「飛行学校の桜」(小林純一)、「海の荒鷺の小父さん方に」(佐藤義美)、「うぶすな」(与田準一)、「神前に舞ふ如く」(河井醉茗)、「春よこい」(藪田義雄)、「鉄塔」(春山行夫)、「道」(室生犀星)、「つばめの歌」(平木一六)、「早起き」(小野忠孝)、「月夜の飛翔」(吉田瑞穂)、「坂道」(木村徳太郎)、「薔薇の莢」(多胡羊齒)、「雪のあそ」(村野四郎)、「拍手」(久保田寅二)、「鐘の戰地」(白鳥省吾)、「日本のお子供」(三好達治)、「日本の土」(西条八十)、「少国民の

秋」(尾崎喜八)、「僕らの手」(長田恒雄)、「小さな勇士」(山本和夫)、「強歩」(水谷まさる)、「ありがたいお勅語」(サトウ・ハチロー)、「ほほゑみさん花さん」(永瀬清子)、「三人の水兵さん」(武田幸一)、「めいよある人たち」(荒居稔)、「満州の墓」(近藤東)、「冬の川中島」(都築益世)、「楠木正成」(吉田宗治)、「特別攻撃隊の方々に」(高村光太郎)。

(3)『少国民科学・年刊I』(一九四四年九月二十五日、国民図書刊行会刊)

本書は少国民文化協会文学部会の作品を収録したものである。目次を記しておく。

僕たちの科学 ..... 林 譲  
すぐれた日本刀 ..... 神田 文三  
数の始め ..... 矢野健太郎  
飛行機の音樂 ..... 野口 昂  
絵の具の話 ..... 石川 清一  
お湯好きの蛇の話 ..... 伊東 祐一  
一粒の米 ..... 佐々木尚友  
暦の話 ..... 松隈 健彦  
セミの羽化を見る ..... 芹沢 喬三  
電波とはどんなものか ..... 佐野 昌一  
ボルネオの天狗様 ..... 高島 春雄  
潜水艦の耳と口 ..... 清閑寺 健

一五年戦争末期の雑誌(三)

- シヒタケ山……………印東 弘玄  
 栄養の話……………藤尾 節子  
 模型機用軽便器具の考案……………杉浦基史郎  
 苦心の発見(折紙八角形)……………藤原安治郎  
 攻撃兵器研究所……………伊東備二郎  
 快速飛行艇「大東亜号」……………土岐 雄治  
 染料第二千六百号……………大下宇陀児  
 ドア・エンジン物語……………蘭 郁二郎  
 あとがき

(4)『少国民文化論・年刊I』(一九四五年二月二十五日、国民図書刊行会刊)

本書は、少国民文化協会文学部会が、部員から自選、他薦の作品を公募して、一九四二年一二月七日の編集委員会で合せを行なったが、応募作品が少數なので、他の既発表作品を物色し、さらに新稿の執筆を依頼して、ようやく刊行された。目次を記しておく。

- 少国民文化への態度……………阿部 仁三  
 技と道……………釣本 久春  
 解放戦と発足への決意……………小川 未明  
 現代文学に於ける少国民文学の位置……………閔 英雄  
 少国民文学読者論……………滑川 道夫  
 童話の本質……………久保 雷  
 幼年童話の流域と今後の使命……………山田 三郎

- 児童文学と少国民文学・管見……………長谷川鉱平  
 昔話について……………与田 準一  
 伝説と昔断……………古谷 綱武  
 桃太郎の現代史……………菅 忠道  
 童話文学界の動き……………塚原健二郎  
 少国民詩の抬頭……………百田 宗治  
 少国民に与へる歴史……………吉村 貞司  
 科学読物の展望……………宮下 正美  
 戦記あるひは報道文学について……………山本 和夫  
 白秋の業績……………異 聖歌  
 編纂後記

『新児童文化』第一冊(一九四〇年十一月)

童 話

- 生きぬく力……………小川 未明  
 鉛筆とドングリ……………坪田 讓治  
 川……………新美 南吉  
 日本の杉……………平塚 武二  
 支那の少年……………山本 和夫  
 庭石切り……………塚原健二郎  
 满洲の思ひ出……………石森 延勇

芽ぐるもの ..... 酒井 朝彦  
甘納豆事変 ..... 木内 高音  
お花見 ..... 横本 捷郎  
少年の翼 ..... 奈街 三郎  
戦争とノンギリ ..... 与田 準一  
詩と童謡

窓 ..... 佐藤 久子  
イッポンミチ ..... 花岡 大学  
かまきり ..... 清水たみ子  
オトウサン ..... 片山 稔  
評論

光堂 仙 一篇 ..... 北原 白秋  
鉛筆詩集 二篇 ..... 百田 宗治  
日暮どき 他 一篇 ..... 阪本 越郎  
山 寺 他 一篇 ..... 多胡 羊齒  
ザウノオヒルネ 他 一篇 ..... 佐藤 義美  
スケート 他 二篇 ..... 吉田 春山  
ツバメノス 他 二篇 ..... 行夫 聖歌  
白羽の矢 七篇 ..... 異

児童のための文化政策 ..... 城戸幡太郎  
児童の読書生活の発達 ..... 波多野完治  
少国民の生活建設と児童文化 ..... 西原 康一  
児童文学史の方法について ..... 菅 忠道  
戦時下の児童放送 ..... 神田 健城  
印刷玩具に探る児童文化 ..... 金井 英一  
児童文化としての紙芝居 ..... 松永 健哉  
児童読物調査について ..... 平沢 薫  
童画史管見 ..... 武井 武雄  
実演童話の現在と将来 ..... 安倍 季雄

児童映画監督論 ..... 阪本 越郎  
小学生のスポーツとその記録 ..... 古賀 残星  
童謡の作曲コレコード再検 ..... 平岡 照章  
雪と滑足

現地点描(絵と文) ..... 原 精一  
ブラジルと日本人 ..... 大石千代子  
興亞の隊列 ..... 近藤 春雄  
ヤツブ島の旅(絵と文) ..... 赤松 俊子  
鳥の渡りの話 ..... 中西 哲堂  
幼年童話

#### 児童読物

かうもりのとぶ空 ..... 関 関  
ハシツテクルタキビ ..... 下畑 英雄  
五年戦争末期の雑誌(三)

一五年戦争末期の雑誌(三)

児童雑誌を探る.....菅忠道・関英雄  
周郷博・奈街三郎・与田準一

海外

独逸の児童文化.....蘆谷瑞世  
伊太利亞の児童文化.....原田讓次  
ロシアの児童文化.....木島一夫

文部省推薦児童図書一覧(1)

よい本・ワルイ本(新刊紹介).....与田岩間  
編輯メモ.....関正男  
挿画.....英雄  
初山滋・富樫寅平・深沢紅子・木俣武・中尾彰・福  
田新生・福与英夫・黒崎義介・小川哲郎・恩地孝四郎

『新児童文化』第二冊(一九四一年三月)

童話

小鳥と少年.....小川未明  
天にのぼる話.....火野葦平  
春になる村.....武内俊子  
夜明けの村.....塚原健二郎  
けし畑のある村.....二反長半  
北国の大.....関英雄  
谷間の池.....坪田讓治

詩と童謡

まつ直ぐな道

北原白秋

牛乳車

阪本越郎

海

野口雨情

孤と沼

山西順了

樹

薮田義雄

ボクトワタン(五篇)

木村秋男

幼年童話

奈街三郎

竹やぶの池

平方久直

きしや

深沢省三

喇叭廟祭見物記(絵と文)

生れる算数問題

原川武雄

わが国のおもちゃ

山田徳兵衛

評論

児童文化に関する覚書

よく耐へて来た作家のために

佐伯都郎

児童文化的領域について

西原慶一

児童文化の諸問題

周郷博

日本のおもちゃと日本玩具業

平沢薰

前田福太郎

児童映画への考察

長谷川和夫

学校放送と受信装置の問題	片桐 顯智
児童文化と教室実践	佐々木鶴一
旧秩序支那に於ける児童文化の性格	国分一太郎
ある日ものいふ	
モーニングと国民服	高瀬 嘉男
紙芝居	松永 健哉
りりしさについて	中村 正利
児童演劇	横地 信
子供の藝術	佐藤加寿輔
新児童文化の特性と根柢	船木 栄郎
周囲にあるバイ菌	安 泰
ラジオと子供	金谷 完治
児童映画に於ける正しき児童觀の確立	後藤 檜根
アンデルセンにことよせて	浜田 文哉
現実と論議	宮原 誠一
児童文學寸感	石森 延男
芸術家としての児童文学者	古谷 緝武
民俗童話と児童心性	菅 忠道
よい本・ワリイ本	波多野完治
児童雑誌を探る	沢薰忠道・奈良英雄・浜田文哉・平周

幼児絵本の選び方と与へ方	波多野完治
絵本	百田 宗治
絵本のことばの在り方	滑川 道夫
絵本研究の一断面	三木 安正
幼児と音の感覺	高橋 軍一
幼児放送の一週間	松葉 重庸
文部省推薦児童図書(2)	
文部省選定児童生徒向映画	
児童文化雑報	
詩と童謡(応募)	
村の学校図書館(映画シナリオ)	荻原 耐
南部戸辺彌(民話)	平野 直
挿画	聖歌
挿画メモ	吳
富樫寅平・棟方志功・安泰・木俣武・小川哲郎・鈴木寿雄・中尾彰・福井英夫・原精一・赤松俊子	
『新児童文化』第三冊(一九四一年七月)	
童話	
僕はこれからだ	
岩のはなし	坪田 譲治
戦争とノンギリ	与田 準一
嘘	
新美 南吉	
詩と童話	

一五年戦争末期の雑誌(三)

ばくらの旗(少年詩十篇).....	巽	聖歌
鉛筆詩集(児童詩十篇).....	百田宗治選	
駱駝の隊商(推薦).....	宮沢千世	
野菜スープ(推薦).....	川添登	
気の毒なドン氏(ファース).....	太田博也	
矢車(他一篇).....	阪本越郎	
児童読物		
阿公さんと狼(人形劇).....	小池慎太郎	
満州囁話(絵と文).....	富樫寅平	
私達の社会の生ひたち.....	加茂儀一	
幼年童話		
た び(推薦).....	横山トミ	
カキネノアサガホ(推薦).....	久野九蘭	
評論		
子供のバリズムのために.....	堀秀彦	
児童文化に関する覚書(二).....	佐伯郁郎	
児童文化財としての実演童話.....	内山憲尚	
幻燈に対する新しい認識.....	宮沢良雄	
新教科書評.....	塚原健二郎	
語彙の問題.....	牛島義友	
資料・アメリカの童話		
児童文化座談会		
百田宗治氏を囲む座談会.....	菅忠道・与田準一・周郷博・吉澤聖歌	
遊び指導の新生面.....	田中文治	
農村児童文化への一考察.....	熊谷洋一	
鬼面縁語		
児童文壇の在方に就て.....	関英雄	
「ある日ものいふ」.....	浜田文哉	
雑文ずれ.....	奈街三郎	
よい本・ワルイ本.....		
大きな蟹・童心の花.....	与田準一	
児童文化論.....	関英雄	
春の神さま.....	大木惇夫	
次郎物語.....	小林純一	
子供の世界.....	古谷綱武	
児童雑誌に探る.....	周郷博・三木安正・平沢薰・石川竹男	
児童映画監督論覚書	阪本越郎	
児童文学の周囲.....	古谷綱武	
雑報		
児童文化賞作品及推薦理由		
児童文化運動		

中支	米山	愛紫	戰友	小川	未明
台灣	西川	滿	戰爭とレンギリ	与田	準一
北九州	大塚	美鳥	山寺	小出	正吾
茨城	樺村	一三	三ばん目の子供	奈衛	三郎
関西	阿貴	良一	幼年日記	関	莫雄
東演童話特輯			「木さん親子」		添原達二郎
轟く皇礼砲			詩と童謡		
馬もいっしょに	原	勝	童話	阪本	越郎
信ちゃんと雅ちゃんとなまづ	新井	太郎	秋の歌	小林	純一
日本人の手	尾関	岩二	こんな朝（推薦）	宇誠	春平
詩と童謡			川の神さま（少年詩五篇）		聖歌
綴方			幼年童話		
農繁期保育所問題特輯			カヘルノオウチ	佐藤	義美
農繁期託児所の問題	浦辺	史	クモ（推薦）	横山	トミ
女学生の季節保育所参加記録	古木	弘造	児童読物		
新潟県金津村現地報告	根岸マシコ		南部炉辺嘶	平野	
岩手県の農繁育所	森	莊巳池	西藏の話	青木	直文教
挿絵					
富権寅平・深沢省三・恩地孝四郎・武井武雄・中尾彰・安泰・野村千春・小川哲郎・深沢紅子・谷中安規・原精一			こともの言葉・おとのの言葉	中野	好夫
このもや改善の諸問題			おもらや改善の諸問題	前田福太郎	
今日の児童雑誌について				及川	甚喜
国民学校・少年団・児童文化	松永	健哉			
厚生事業と少国民文化	三野	亮			

一五年戦争末期の雑誌(三)

匿名一頁評論

ラジオ……………北町 横助

絵本……………根本 純平

児童劇……………横寺 三吉

綴方……………須坂 三郎

童話……………鳴海 太郎

童謡……………中田 安雄

人形劇と学校少年団の娛樂問題……………間瀬 正次

南洋児童の綴方に就いて……………久保 喬

児童雑誌に探る……………周郷博・菅忠道・松葉重庸・関英雄

日本少国民文化協会特輯……………上田 俊次

日本少国民文化協会の設立まで……………佐伯 郁郎

日本少国民文化協会要綱案……………日本少国民文化協会

日本少国民文化協会に対する諸家の希望……………奈街三郎・塚原健二郎・与田分一・太郎・準一・菅忠道・周郷博・聖美・歌謡・佐藤聖美

小川未明先生に訊く創作童話の座談会……………

児童文化座談会……………北九州 大陸

日本少国民文化協会の設立について……………上田 俊次

日本少国民文化協会の設立まで……………佐伯 郁郎

創作童話研究特輯……………大塚 美鳥

巖谷小波論……………北九州 大陸

小川未明童話研究……………波多野完治

鈴木三重吉論……………小山 東一

宮沢賢治童話論……………森 莊巳池

坪田譲治論……………堀 秀彦

現代童話の性格に関するノオト……………百田 宗治

中堅作家論……………塙原健二郎

新人とその作品……………水藤 春夫

文部省推薦児童図書  
日本出版文化協会推薦児童図書

各地の児童文化運動……………小野三治男

北海道……………阿貴 良一

大陸……………大塚 美鳥

綴方……………北九州 大陸

編輯メモ……………大塚 美鳥

装画……………地主四郎・深沢紅子

原精一・富樫寅平・栗木幸次郎・安泰・小池巖・恩

巽 聖歌……………

（一九四二年六月刊、第一卷第一号、通巻一号）

日本少国民文化協会の使命（巻頭言）……………小野 俊一

『少国民文化』創刊号

X X X X X

日本少国民文化協会の発足を祝す	東条英機
民族、国家発展の基底	奥村喜和男
世界の日本と少国民文化	長谷川如是閑
少国民文化と科学教育	富塚清
詩・特別攻撃隊の方々に	
大東亜戦争と日本少国民	高村光太郎
長谷川如是閑 吉川英治 阿部仁三 一二三利高	座談会
前田隆一 日暮豊年 川島四郎 菅井準一 小野俊一	
上村哲弥 百田宗治 波多野完治	
おもちゃの改善と資材問題	前田福太郎
マレーの子供たち	岡部光子
家庭における母と子の問題（母の哀）	羽仁説子
文化を創る力（一）（教師の貢）	前田隆一
童話作家としてのヘルマン・ヘッセ	高橋健二
批判と提唱	
少年小説の新開拓	保田与重郎
託児所と幼稚園の問題	古木弘造
少国民雑誌の新面貌	周郷博
少国民文化展望	
童話作家のことば（読物）	酒井朝彦
今日明日の遊具玩具（遊具）	山下俊郎
紙芝居の街頭性（紙芝居）	佐木秋夫
良書の普及（出版）	渉

今日の舞踊教育（舞踊）	石井漠
口演童話の立脚点（童話）	久留島武彦
学校劇の求め方（演劇）	加藤光
挿絵とは何か（絵画）	武井武雄
少国民音楽部への課題（音楽）	園部三郎
映画部会の使命（映画）	稻山達雄
戦時少国民生活とラジオ	片桐顕智
良書	百田宗治
光を育てる人々（連載第一回）	豊島与志雄
頬輪（童話）	小川未明
美しい国（詩）	阪本越郎
軍人援護精神昂揚の綴り方募集	少国民文化ニュース
日本のあらわし	
会告	
協会の活動	
編輯後記	

『少国民文化』七月号

（一九四二年七月刊、第一巻第二号、通券二号）

日本少国民文化的性格	小西重直
国学者の教育論	志田延義
日本の母名歌選集（一）	斎藤濤
少国民の科学的鍛成	坪井忠二
日本の子供（詩）	三好達治
国防國家と少国民文化	
座談会	

一五年戦争末期の雑誌(3)

谷萩 大佐	上田 中佐	古屋 芳雄	小山 隆
前田福太郎	相野田弥平	矢川 徳光	阪本 越郎
小野 俊一	上村 哲弥	百田 宗治	
ふきどり・保育所・手伝班		川崎 大治	
現代ドイツ童話作家研究		高橋 健二	
羨の行者(母の貢)		飯島 稔司	
文化を創る力(教師の貢)		前田 隆一	
批判と提唱			
最近の児童書を読んで		中野 好夫	
幻燈の新しい進出		成沢 玲川	
動物画について		小山内 龍	
少国民文化展望			
遊 具	山下 俊郎	紙芝居	佐木 秋夫
読 物	酒井 朝彦	童 話	新井 太郎
舞 踊	石井 漠	絵 画	岡本 一平
ラジオ	片桐 顯智	映 画	稻田 達雄
演 劇	加藤 光	出 版	藤田 主雄
音 楽	園部 三郎		
推薦文化財月報			
小林虎三郎翁のこと			
光を育てる人々(連載第二回)			
おばあさん			
村の四季			
東井 義雄			

海は夕風・詩……………巽 聖歌

渡り鳥の結ぶ日本と南洋……………内田清之助

軍人援護精神昂揚の綴り方募集 大東亜戦争日誌

口絵・グラフィア 協会の活動

表紙・中川一政・目次、扉・小穴隆一

挿画・中川一政、吉田賀三郎、鈴木信太郎、松野一夫

編輯後記

『少国民文化』八月号

(一九四二年八月刊、第一巻第三号、通巻三号)

日本少国民文化の再建設 井上 司朗

少国民文化の啓培 海後 宗臣

少国民文化についての私観 上村 哲弥

家風と羨み 藤沢 寛彦

日本の母名歌選集(1) 斎藤 初

詩・日本 丸山 薫

少国民の生活と教師(教師の貢) 宮瀬 陸夫

言葉の羨みに触れて(母の貢) 内藤 灌

調査 地方少国民の読書生活 波多野完治

村の保育所から 根岸 早苗

南方の伝説 藤沢 衆彦

批判と提唱

文化運動としての人形劇 移動人形劇場

児童映画当面の諸問題	後藤 榎根
良 善	百田 宗治
少国民文化展望	
遊 具	山下 俊郎
読 物	酒井 朝彦
舞 踊	石井 漢
ラジオ	片桐 顕智
音 楽	園部 三郎
推進文化財月報	
常用漢字一覧	
光を育てる人々（連載第三回）	豊島与志雄
牛飼ひの少年	石森 延男
つばめの村	塚原健二郎
象と鯨（科学読物）	須川 邦彦
新人創作・少国民作品募集	大東亞戦争日誌
新刊紹介	協会の活動
少国民文化ニュース	編輯後記
『少国民文化』九月号	
(一) 一九四二年九月刊、第一巻第四号、通巻四号)	
皇道文化の本義と少国民	鈴木 重雄
少国民文化についての私観(1)	上村 哲弥
日本の母名歌選歌(1)	須川 邦彦
柳田国男氏に訊く	
伝承文化と少国民文化	訊く人上村哲弥記者
少国民の生活調査とその方法	山下 俊郎
肉体の鍛成と精神の鍛成（教師の貢）	小山 隆
日本の母とイタリヤの母（母の貢）	深尾須磨子
村の子供たち	古谷 綱武
「次郎物語」余談	下村 湖人
編輯者の性格	内山 基
教育舞踊の立脚点	渋井 二夫
言葉に禊ぎ言葉を禊ぐ	与田 準一
少国民文化展望	
出版 小林 純一 紙芝居 志賀 君江	
演劇 加藤 光 童話 原 勝	
遊具 G N G 絵画 富樫 寅平	
読物 塚原健二郎 映画 関野 嘉雄	
舞踊 光吉 夏弥	
全国少国民「ミンナウタヘ」大会・「進め少国民」楽譜	
光を育てる人々（連載第四回）	豊島与志雄
子ブタとゴムマリ	山田 三郎
詩・少国民の秋	尾崎 喜八
象と鯨2（科学読物）	須川 邦彦

一五年戦争末期の雑誌(三)

新人創作・少国民作品集、大東亜戦争日誌

推薦文化財月報、協会の活動

新刊紹介、少国民文化ニュース、編輯後記

『少国民文化』十月特大号

(一九四二年一〇月刊、第一卷第五号、通巻五号)

皇国少国民教育の本義

續編

弥三

常に永遠に学ぶ心

高橋 健二

哲弥

国民文化の性格と少国民

上村 哲弥

少国民文化鼎談

佐伯郁郎・前田福太郎・阪本越郎

詩・歴史

百田 宗治

日本の母名歌選釈(四)

斎藤 劑

特輯・紙芝居 文化運動の一翼としての紙芝居

大島 正徳

発生史的考察

松永 健哉

街頭紙芝居の諸問題

渋沢 青花

教育紙芝居の進路

佐木 秋夫

企画・脚本の問題にふれて

相馬 泰三

画の問題

高橋 五山

街頭紙芝居の演出

野村 直次

紙芝居の説明

内山 勲尚

普及と組織

砥上 峰次

農村と紙芝居

古谷 綱武

軍人援護と紙芝居 山根絹一郎  
童話作家の立場から 川崎 大治  
附・紙芝居文庫 編輯部

座談会・紙芝居の芸術性の問題をめぐって 本誌主催  
「出席者」川崎大治・松永健哉・新井太郎・鈴木景山・  
渋沢青花・上村哲弥・関野嘉雄・波多野完治  
思想戦と教育者(教師の頁) 平櫛 少佐  
幼児の絵の指導(母の頁) 武井 武雄  
批判と提唱 加藤 光

学校劇団と教師 内藤 灌  
少国民のための科学書について 吉野源三郎  
うれしい発見・少年詩集と鉛筆部隊 豊島与志雄  
少国民文化展望 佐藤 義美  
童 話 原 勝 文 学 塚原健二郎  
レコード 高橋 軍一 絵 画 富樫 寅平  
舞 踏 光吉 夏弥 出 版 小林 純一  
装 具 牛島 義友 音 樂 小出 浩平  
光を育てる人々(連載第五回) 豊島与志雄  
詩・海の荒鷺の小父さん方に 畠・中川一政  
全国少国民軍人援護綴り方入選作品 佐藤 義美  
新人創作・少国民作品募集、大東亜戦争日誌

一、二等入選作品並に入選者氏名

推薦文化財月報、協会の活動

少国民文化ニュース、編輯後記

『少国民文化』十一月号

(一九四二年一月刊、第一卷第六号、通巻六号)

新らしい時代と伝統.....保田与重郎

貴禄のある生活(教師の貢).....阿部仁三

空を征く子とその母(母の貢).....川島四郎

日本の母名歌選歌(五).....斎藤瀬

特輯・玩具文化の諸相

日本玩具文化小史.....藤沢衛彦

近代玩具文化概観.....関寛之

玩具生産の変遷.....西川友武

子供の遊びと玩具.....三木安正

科学教育と玩具.....阪本孝

玩具と模型.....三苦正雄

よいおもちゃへの構想.....前田福太郎

資材転換より玩具転換へ.....牛島義友

小物玩具の諸問題.....松前福広

玩具文化向上の根底に横はるもの.....倉持福雄

創案者の位置.....阿部治良

装飾玩具のこと.....山田徳兵衛

郷玩蒐集の回顧.....武井武雄

農村のことものつくる玩具.....根岸草笛

一五年戦争末期の雑誌(三)

批判と提唱

少国民レコードへの批判.....園部三郎

童画についての感想.....荒木龍三郎

時評・少年少女雑誌への一視点.....古谷綱武

満洲のこと.....黒聖歌

展望

レコード.....竹越和夫 舞踊.....光吉 夏弥

文學.....吉田甲子太郎 出版.....関英雄

紙芝居.....相馬泰三 童話.....金沢嘉市

全国少国民軍人援護綴り方入選作品 三等入選作品二十篇

甚七おとぎばなし(野間仁根).....坪田讓治

詩道.....董

光を育てる人々(連載第六回).....豊島与志雄

新人創作・少国民作品募集、新刊紹介

推薦文化財月報、協会の活動

少国民文化ニュース、編輯後記

少国民進軍歌当選作

グラディア写真解説

山田徳兵衛・  
倉持福雄・  
沢笛敏

一五年戦争末期の雑誌(三)

『少国民文化』十二月号

(一九四二年一二月刊、第一巻第七号、通巻七号)

卷頭言・移植造林の第一期終る……………小野俊一

少国民映画政策の当面の問題……………三橋逢吉

次代を築くもの(バターン作戦從軍所感)……………柴田賢次郎

日本の母名歌選歌(六)……………斎藤潤

特輯・少国民演劇の新展開

文化と演劇……………新関良三

せりふと話言葉……………釣本久春

少国民演劇今日の進路……………斎田喬

少国民劇団小史……………宮津博

学校劇小史……………落合聰三郎

演出覚え書……………小池慎太郎

勤労少国民と工場演劇……………鈴木舜一

移動演劇と少国民演劇……………日本移動演劇聯盟事務所

公園と児童演劇……………関忠夫

劇的な学習……………宮崎靖

学校劇は何う指導するか……………岡田鑑藏

座談会・演劇人に訊く・少国民演劇の現在と将来

出席者(飯塚友一郎・伊藤喜朗・佐藤徳三郎・千賀彰・斎田喬・田郷虎雄・その他)

グラフィア写真貢・少国民劇団写真集……………卷頭

展望

文学……………吉田甲子太郎

レコード……………竹越和夫

紙芝居……………砥上峰次

出版……………閔英雄

音楽……………小出浩平

童話……………岡川典治

課外読物の選択とその指導

秋田喜三郎

今月の少国民レコード

上田友龜

良書・四錢の絵本

百田宗治

時評・幼年雑誌の基本考察

春山行夫

漫画私見

小川哲男

はたらく土の子ら

松田基次郎

東条総理大臣・大東亜戦争一周年ニ際シテ少国民ノ方タチニ

光を育てる人々(遺稿第七回)

すすき野(ゑ・初山滋)

豊島与志雄

科学読物・飛行艇の話

久・中川一政

新人創作・少国民作品募集

二反長半

少国民演劇脚本募集、少国民文化ニュース、大東亜戦争日誌

浜川栄

少国民紙芝居脚本並に論文募集、協会の活動

推廣文化財月報、編輯後記

『少国民文化』新年号

(一九四三年一月刊、第二巻第一号、通巻八号)

若き血を

桜井忠温

少国民文学の方向

加藤武雄

戦争画の現代的意義

坂垣鷹穂

日本国民童話講座「開講」	島津 久基
特輯・少国民文学	
詩・童謡の流れと回帰	与田 準一
幼児童話の流域	山田 三郎
童話文学のために	塙原健二郎
科学読物の本質	宮下 正美
地理読物の諸問題	小出 正吾
黄表紙と小波	森 三郎
翻訳者の反省	光吉 夏弥
評論の任務	滑川 道夫
文学部会の方針について	神崎 清
少国民文化と少国民文学・座談会	
豊島与志雄・川端康成・石森延男・吉田甲子太郎他	
最近の作品を読んで(二三)	阪本 越郎
北原白秋の業績	異 聖歌
村の学校(現地報告)	日比野士朗
教材紙芝居の作り方と演り方	平林 博
冬のこともの生活(生活指導)	内藤寿七郎
文化財の批評と紹介	
時評・少年少女雑誌	吉谷 緝武
絵本の時代性	今村 太平
最近の漫画映画	鉢村 大二
十二月の少国民レコード	小出 造平

少国民舞踊と交響舞踊運動	牛山 充
戦時下の童謡	上田 友竜
創作	
大きな声(詩)	丸山 薫
花咲爺(詩)	百田 宗治
皇太神宮の神馬に寄す(詩)	与田 準一
あの日(詩)	小林 純一
土蜘蛛と偽者(詩)	藏原伸二郎
鉄工所の二少年	吉田甲子太郎
戦ふ日本艦隊	福永 恭助
新人創作・少国民作品募集	大東亜戦争日誌
少国民演劇西本募集	少国民文化ニュース
推薦図書月報	協会の活動
	編輯後記
『少国民文化』二月号	
(一九四三年二月刊、第二巻第一号、通巻九号)	
横山少佐の手紙	岩田 豊雄
日本人の矜りと嗜み(一)	岸田 国士
国民鍛成としての国語教育	石井 庄司
国防教育と少国民・座談会	
桐原保見・日比野士朗・阿部仁三・小山隆	
特輯・童話の在り方	

一五年戦争末期の雑誌(三)

童話への反省	新井 太郎	科学読物 戰争と船	和辻 春樹
童話の実践	原 勝	大東亜戦争日誌	編輯後記
幼児童話の諸問題	内山 憲尚	協会の活動	
童話界思ひ出話		『少国民文化』三月号 (一九四三年三月刊、第二卷第三号、通巻一〇号)	
思ひ出の三十年	安倍 季雄	隠れた闘ひ	尾崎 士郎
童話三十年	蘆谷 蘆村	日本人少国民観の発達(一)	石川 謙
あの頃その頃	松美 佐雄	日本人の矜りと嗜み(一)	岡 不可止
日本国民童話講座・因幡の白兔	佐伯 郁郎	子供の世界について	岸田 国士
日本の子の駆け(生活指導)	鳥津 久基	特輯・出版新体制と児童図書	芳賀 檍
鈴山の母と子(現地報告)	金丸 光	出版文化と少国民教育	海後 宗臣
少年団だより 布施市の六隊訓練	矢川 德光	児童図書企画調整への構想	百田 宗治
批評と紹介		勤労青少年の読物とその指導	野津 謙
時評・文化主義と煽動主義	吉村 貞司	出版偶感	奈良 静馬
良書への希求	藤田 圭雄	出版新体制と児童読物	北原 鉄雄
1月の少国民レコード	平尾貴門男	出版新体制への決意	小川 菊松
少国民「われらのちかひ」綴方作品(五篇)		読書生活の協同化・組織化	山田 清人
少国民に与へる訓話	山名和子・藤田頤・末崎マス子	児童出版の分類から見た出版傾向	日本少国民文 化協会研究所
総理大臣 創作	東条 英機		
〔詩〕虎	坪井 忠二		
見事な軍艦	木下 允明		
宇野 浩二	与田 準一		

『少國文化』二月号

(一九四三年三月刊) 第二卷第三号 通卷(10号)

隠れ六賀江  
月山一貞謙

松下村塾の少年教育

日本人の矜りと嗜み(1)……………岸田国士

# 子供の世界について

特輯・出版新体制と児童図書  
出版文化と少国民教育

出版文化の發展と教育  
児童図書企画調整の一構想 ..... 百田宗治

勤労青少年の読物とその指導……………野津謙

出版偶感.....奈良 静馬

出版新体制と児童読物 ..... 北原 錄雄  
古文刊行會 ..... 小川 蘭公

# 白版新体制の発展

## 読書生活の協同化・組織化

## 児童出版の分類から見た出版傾向……………日本少国民文化協会研究所

少国民生活と読書・座談会

〔詩〕虎 異  
見事な軍艦 宇野 聖歌  
浩二

科学読物はどう与へるか	宮下 正美
卒業後の指導（生活指導）	宮内寺三郎
時評・使命の検討	吉村 貞司
近頃の新作紙芝居	本山 萩舟
敵国アメリカのことわざ	中野 五郎
現地報告・一つの典型	石原 守明
創作詩	お母さん
早春童子（近詠八首）	佐藤 義美
幼き友に（誌章十首）	岡山 嶽
峠の櫻（一幕）	土屋 文明
科学読物 大砲の話	齋田 齋
大東亜戦争日誌	庄司 武夫
新人創作・少国民作品募集、推薦図書月報	少国民文化通信
協会の活動、編輯後記	

『少国民文化』四月号 特集・絵画と少国民	吉村 貞司
（一九四三年四月刊、第二巻第四号、通巻二一號）	
自他一如といふこと	加藤 武雄
神武の御鴻業	河野 省三
民族・国土・國家	大串鬼代夫
日本少国民観の発達（一）	石川 謙
松下村塾の少年教育（承前）	岡 可止
座談会 民族の力と少国民育成	島津 久基
美濃口時次郎 山本中佐、田代中佐、斎藤謙、斎藤响、（協会側）小野俊一、上村哲弥、内田克巳	荒城 季夫
日本国民童話講座——かぐや姫	金原 省吾
絵画と少国民	石井 柏亭
少国民の芸能教育について	北川 民次
日本の童用書	
童画の考察	
最近の絵本統計・その分類と出版傾向	
日本少国民文化研究所	
南の絵本	吉村 貞司
時評・日本の要求する科学	光吉 夏弥
——少国民科学雑誌批評	
三月の少国民レコード	有坂 愛彦
少国民文化通信	
国防国家の少国民体力化	神谷 秀夫
少国民紙芝居脚本・論文八選発表	
〔小説〕敵のうしろへ	阿部 知二
〔詩〕兵発つ	菊地 精一
手ならひ	藤井 静江
星と戦争	野尻 抱影
大東亜戦争日記、協会の活動、推薦図書月報、編集後記	

一五年戦争末期の雑誌(三)

『少国民文化』五月号

(一九四三年五月刊、第一卷第五号、通卷一二号)

八紘為字と八紘一字……………島山 清身

映画月評……………映画部会

海洋と少国民……………日暮 豊年

少国民文化……………斎藤四郎・武田武彦 産業小戰士壮行大会記

大東亜戦争と教育……………斎藤 忠

懸賞・童話話材入選發表 懸賞・少国民紙芝居論文選評

民族・國土・國家(二)……………大串兔代夫

作品……………佐々木信綱

日本少国民觀の發達(三)……………石川 謙

歌 わか竹……………佐々木信綱

特轉・決戦下の科学教育……………仁科 芳雄

山嶽の少年……………関 英雄

科学の決戦と少国民……………富成喜馬平

大東亜戦争日誌……………編輯後記

少国民科学化への考察……………小野 俊一

少国民文化通信……………佐治 克己

国民学校の理數と工作を語る・座談会

出席者 前田 隆一 瀬川 昌邦 日野清次郎

高木佐加枝 千野 剛 芹沢喜三他

日本国民童話講座・桃太郎 島津 久基

日本国民童話講座・桃太郎 小寺 融吉

日本国民童話講座・桃太郎 渡井 二夫

日本国民童話講座・桃太郎 賀来 琢磨

日本国民童話講座・桃太郎 竹内 信子

日本国民童話講座・桃太郎 山田 耕作

日本国民童話講座・桃太郎 牛山 充

日本国民童話講座・桃太郎 稲葉 信子

日本国民童話講座・桃太郎 田辺 尚雄

日本国民童話講座・桃太郎 本間 昇

舞踊・少国民進軍歌……………舞踊部会

決戦下の少国民(少年団だより)……………

『少国民文化』六月号

(一九四三年六月刊、第二卷第六号、通卷一三号)

幼年時代の情操……………坪田 讓治

日本人の生活——都市文化と地方文化の関係について——

長谷川如是閑

少国民舞踊運動の新構想……………波井 二夫

日本少国民觀の發達(四)……………石川 謙

〔詩〕いとし子を……………中原 緑子

戦時下の音楽文化……………山田 耕作

国民教育に於ける音樂……………

——その正しい在り方に就いて……………乘杉 嘉寿

共榮園の音樂文化工作……………

戦時少国民音樂の方向……………

——国民学校の唱歌室から	上田 友龜
日本国民童話講座	島津 久基
少国民文化相談	
飛驒のこと	
保育の記録・農繁期の保育所	江馬三枝子 根岸 草笛
「少国民文化」教室の紙芝居	小林金次郎
玩具研究所のこと	関 寛之
大東亜戦争日誌	
作家研究（其の一）巖谷小波	森 三郎
時評・少国民詩論の確立	喜 聖歌
時評・少年少女雑誌の創作について	閔 英雄
少国民音盤月評	沖 不可止
『小説』牛をつないだ権の木	新美 南吉
協会の活動、編集後記	
『少国民文化』七月号	
(一九四三年七月刊、第二卷第七号、通卷一四号)	
詩・山本司令官の戦死	尾崎 喜八
山本元帥の思ひ出	日暮 豊年
山本元帥を偲ぶ	後藤隆之助
特輯・少国民の鍛錬	
鍛錬について	斎藤 濬
健兵と少国民	津田 耕作
五年戦争末期の雑誌	(三)
隨筆	
『鎌へ』の世界	百田 宗治
村の子供	吉田甲子太郎
魂への鍛錬	山崎 利一
実践生活鍛錬と家庭連絡	半田 雄三
都会児童の鍛成	久保田亀藏
地方青少年文化の一問題	船山 信一
明治時代の少年雑誌	木村 小舟
作家研究 押川春浪	菅 忠道
七夕祭について	松浦 義昌
農繁期の保育（生活指導）	斎藤 文雄
映画特輯	
戦争映画と少国民	権田保之助
映画芸術と少国民	津村 秀夫
少国民映画製作について	渥美 輝男
映画月評（家、望楼の決死隊、くもとちうりつぶ、シンガボーエル総攻撃、宮本武蔵、海ゆかば、海軍戦記）・映画部会	
少年小説の倫理・時評	閔 正義
新童画考・時評	伊勢 正義
新人創作応募童話作品審査発表	編輯部
作品	
詩・二つの海	阪本 越郎
三つの誓（懸賞入選紙芝居脚本）	志賀 義雄

一五年戦争末期の雑誌(三)

ビルマの若者(ゑ・富樫寅平) ..... 山本 和夫

大東亜戦争日誌、協会の活動・地方通信

推薦図書・音楽、編輯後記

『少国民文化』八月号

(一九四三年八月刊、第一巻第八号、通巻一五号)

アツツの桜・詩 ..... 百田 宗治

アツツ島の忠魂 ..... 佐々木克己

特輯・戦ふ日本母性

母は祖国の如し ..... 小川 未明

日本母性の伝統 ..... 高須芳次郎

たらちねの母 ..... 石井 庄司

母の勤労 ..... 嘉陵 義等

詩・母も戦ふ ..... 竹内てるよ

歌・母性讀歌 ..... 今井 邦子

隨想

松陰の母 ..... 岡 不可止

母に寄せて ..... 佐藤 得二

日本国民童話講座・猿蟹合戦 ..... 島津 久基

明治の玩具(上) ..... 山田徳兵衛

作家研究 鈴木三重吉 ..... 滑川 道夫

勤労青少年の鍊成 ..... 乗富 丈夫

音盤特輯

国民学校と少国民音盤

小出 浩平

音盤の思ひ出

宮城 道雄

胡桃わりその他

上司 小剣

戦時下の音盤文化

高橋 軍一

音盤が出来上るまで

音盤部会 関 英雄

作家と作品と読者・時評

斎田喬清

演劇教室・報告

神崎 高橋

作品 飛ぶグライダー(ゑ・中尾彰)

入選「少国民海の歌」編輯後記

『少国民文化』九月号

(一九四三年九月刊、第二巻第九号、通巻一六号)

特輯・続空決戦と少国民

海鷺の鎌成を見る

清閑寺 健

空を制せざして勝利なし

木下春一郎

非常時日本を背負ふ人は誰か

橋口 義男

座談会・航空作戦に従事して

出席者 陸海軍報道班員四氏外

決戦下の模型航空機指導

室 靖

戦力増強と模型航空

北村 小松

一郎

空へ行く少年の途

作家研究 鈴木三重吉（下）……………滑川 道夫  
明治の玩具（下）……………山田徳兵衛  
日本児童文学小史（一）……………日本少国民文化研究所  
隨想

我が子に額づく……………上村 哲弥

弟 に……………高村 鉄太郎

指導・防空と少国民……………宮地 直邦

決戦下の少国民文化体制……………新井 太郎

新人の運命……………関 英雄

「鉄の紋所」・「心のメダル」（話材）……………童話部会

「動物ども」について……………吉田甲子太郎

講話・空の決戦と少国民……………富永 謙吾

詩・海辺にて……………江口 棟一

作品・白地に赤く……………深川 久弥

推薦図書月報、協会の活動

大東亜戦争日誌・募集詩・童話選後評

編輯後記

『少国民文化』十月号

（一九四三年一〇月刊、第一巻第一〇号、通巻一七号）

愛国いろはかるた……………日本少国民文化協会

バドリオ降伏を繰る世界の戦局……………大場 弥平

特輯・軍人援護

戦争と軍人援護

軍人援護と少国民

決戦下の軍人援護

少年団の軍人援護

少国民の前戦慰問

援護のこころ

母の家・子らの園

握飯の義人・軍人援護童話材

作家研究 小川未明（一）

少国民科学雑誌への期待

玩具時評

日本国民童話講座・五条橋

工場地帯の保育所

推薦詩

野菜畠

兄さんへ

軍人援護 少国民の詩と綴方作品

フウトウ

ハイタイサン

アッツ島の勇士へ擣げる文

千人旗と胴巻

匝瑳 駿次

山根緝一郎

白川 次郎

須藤 正次

瓦家善四郎

与田 準一

山野 一雄

新井 太郎

山本 和夫

村越 司

倉持 福雄

島津 久基

牧 哲男

一五年戦争末期の雑誌(三)

新人・少国民募集作品入選発表	編輯部	集団訓練第一	福田 武次
詩・大和の母を讀へて	深尾須磨子	時局解説	
作品・産声	下畠 卓	戦闘配置下の少国民文化	田中 仁
推薦図書月報、協会の活動		闘ふドイツ少年(防空話材)	金沢 嘉一
大東亜戦争日誌、軍人援護紙芝居競演会		勝ち抜く力 防空紙芝居脚本	
愛國子守歌募集制定、編輯後記		朝・土浦海軍航空隊	百田 宗治
幼児防空対策資料		滑空訓練を観る	長谷 健
幼児防空対策資料に就て	日本少国民文化協会	表紙	安井小弥太
陸軍省防衛課	宮地 直邦	推薦図書	
特輯・防空と決戦少国民		協会の活動、防塞手帖	
「国土防衛と少国民防護」を訊く		大東亜戦争日誌、編輯後記	
空襲下少国民の救急	竹村 文祥	『少国民文化』一二月号	
都市防空と少国民防護	谷川 昇	(一九四三年一二月刊、第一卷第一二号、通巻第一九号)	
学校防空の要領	森田 孝	特輯・勤労と少国民	
少年団の防空訓練と対策	久保田武夫	決戦下の勤労少国民	三輪 寿壯
座談会		勤労動員と女子青少年	国塙耕一郎
防空と少国民防護	宮地直邦・宇田 波多	戦ふ小戦士の姿(生活記録)	
子供をどう護るか	野川与三郎・完治他	子供を工場へ送る人々の心構	高橋 亭
保育施設の防空態勢を見る	窪山 文雄	工場と少国民の文化指導	近藤栄太郎
	小川未明(一)	産業戦士の生ひ立ち	
		森 徳治	
		現地報告 教育即生産の実践	吉富 勇
		日本児童文学小史	日本少国民文化研究所
		山本 和夫	

満洲の子供と映画	小林 盛策
支那の少年	福田 恒存
藩の子弟教育	古谷 綱武
敵機を識らう	中村 時蔵
第四の竜	氏原 大作
汽車開通(一)	松阪 忠則
書評	安井 小弥太
表紙・カット	大作
協会の活動	甲一
編輯後記	小林
『少国民文化』新年号	中村
(一九四四年一月刊、第三卷第一号、通巻二〇号)	時蔵
△詩△桃太郎出陣	百田 宗治
皇國教育の理念と少国民	志田 延義
民族の精神——ブーゲンビル島沖航空戦	日暮 豊年
日本の家	中川 善之助
△みくにの子供△	董平
戦ひに向ふ子供	火野 葦平
戦ひの中の子供	日比野士郎
ことるとおとな	吉田甲子太郎
遊びと教養なもの	佐藤 通次
農の新使命と少国民	与田 準一
菅野 兵治	司朗
△木炭増産と子供△	小池 長
小国民文化報国挺身隊童話部隊員	依山 勝
童話慰問	長沼 依山
製炭山村の行脚	原 勝
一長野県各少国民大会	勝
山里を訪ねて	富成喜馬平
島根県現地報告	原 勝
航空青少年隊	栗下喜久治郎
働く町の子供たち	栗下喜久治郎
村の増産と子供	栗下喜久治郎
日本児童文学小史——江戸時代の一	栗下喜久治郎
日本少国民文化研究所	栗下喜久治郎
権太アイヌと子供とおもちゃ——白浜ユンタにて——山本祐弘(絵も)	栗下喜久治郎
汽車開通(三)	氏原 大作
協会の活動	氏原 大作
『少国民文化』二月号	氏原 大作
(一九四四年二月刊、第三卷第二号、通巻二一号)	氏原 大作
特輯・大東亜共同宣言	氏原 大作
大東亜! ぼくらのふるさと!	神保光太郎
皇道と五原則	佐藤 通次
大東亜共同宣言と少国民	井上 司朗
八紘一字と興亞の子供	司朗

一五年戦争末期の雑誌(三)

明るい大東亜（中華）	釣本 久春	世の母に求むるもの	阿部 仁三
泰国の青少年文化（タイ）	江尻英太郎	陸軍通信兵学校	松永 健哉
興亜教育と満洲国（満洲）	千田 万三	陸軍野戦砲兵学校	山本 和夫
比島の子供（フィリピン）	今 日出海	対潜の花・水測兵	後藤 檻根
戦ふ少国民（ビルマ）	高見 順	海の少年兵	清閑寺 健
軍人精神と少国民	那須 義雄	楠木正行論	橋本 実
マキン・タラウの武人達	高村光太郎	青年将校は斯く戦つてゐる	黒崎 貞明
マキン・タラウの英魂	後藤 恒道	大空の人々	斎藤 隆一
大東亜宣言と吾等の覚悟	小出 正吾	國の子の父として	浜本 浩
大東亜圏の子供の文字	倉持 福雄	空のひらさ	塙原健二郎
大東亜の玩具の過去と将来	藤沢 龍雄	大東亜少国民文化の建設	光吉 夏弥
少国民絵画の自覚	関野 嘉雄	工場の少女たち	壹井 栄
大東亜戦争と児童映画	少年警察官	少年警察官	下畠 卓
掲示童話	切羽にたゝかふ	切羽にたゝかふ	関 英雄
▲戦ひの時の汽車	太田黒亮彦	優良農村を行く	長谷 健
▲腕時計	新倉しげる	新倉しげる	
東洋の子			
協会の活動			
編輯後記			
『少国民文化』三月号			
(一九四四年三月刊、第三卷第三号、通巻二二二号)			
少国民の興亜教育			
加藤 武雄			
『少国民文化』三月号			
協会の活動			
大東亜戦誌			
表紙・カット			
協会の活動			
大東亜戦誌			
推薦図書			
編輯後記			

『少国民文化』五月号

(一九四四年五月刊、第三卷第四号、通巻二三号)

承認必謹と教育の本義(対談)……………松本勝三 神崎清

行学一体の教育……………神田 次郎

薩藩の郷中教育……………村野 守治

疎開と少国民……………富永 誠美

紙芝居の挺身活動……………佐木 秋夫

発行の一時中止について……………阪本 越郎

大東亜少国民文化の建設……………光吉 夏弥

『少国民文化』六月号

(一九四四年六月刊、第三卷第五号、通巻二十四号)

提 言……………大島 正徳

託児と生産戦線(座談会)

牧賢一、松本征二、谷川貞夫、松島正儀

川田百合子、塩谷アイ

農村の子供の読物……………梅山 一郎

産業郷土の理想……………内田 克巳

留守家族の児童保護

ドイツ兵と少年少女……………新井 太郎

雄藩の子弟教育(会津藩)……………山口 孝平

菅公精神、学童疎開、保育施設、本会の活動

『少国民文化』七月号

(一九四四年七月号、第三卷第六号、通巻二五号)

提 言……………甲賀 三郎

戦時下に観る衆の姿……………

伊波南哲・都築益世・山本和夫・古谷綱武・江上フジ・  
下村湖人

文化と鍛錬(対談)……………釘本 久春

少国民文化時評……………小出 正吾

周郷 博

創作 仔 熊……………福田 清人

録音室

出版問答……………懇 談 会

必勝の信念

親泊 中佐

軍人援護

吉川 覚

フィリッピン人

大島 正徳

壁童話

谷 川……………平塚 武二

協会特報

豆手帖

『少国民文化』八月号

(一九四四年八月刊、第三卷第七号、通巻二六号)

提 言……………須川 邦彦

漁村における少国民文化……………有馬頼寧・吉川義太郎・小出正吾

一五年戦争末期の雑誌(二)

日本の家庭と競争	佐藤	通次
ナチス少国民文化政策	佐竹	金次
壁童話 郭公はなぜ鳴くか	佐藤	春夫
録音室		
ジャワより帰りて	坪田	讓治

決戦下の少国民放送	片桐	顯智
決戦と文化財		
舞踊	渡井 二夫・露木 貞夫	
音楽	上田 友龜・紙芝居	佐木 秋夫
少国民図書傾向	研究所	

協会報		
地方文化		
東北	秋田 雨雀・上田長太郎	
関西	足立 勤・椋 鳩十	
九州	長谷 健・玉井 政雄	

『少国民文化』一〇月号

(一九四四年一〇月刊、第三卷第九号、通卷二八号)

提言	古谷 綱武	周郷 博
学童諺闇と新文化	芳賀 檍・肥後和	
子供の体質と作業能力	井柏亭・杉靖三郎	
詩 空ゆく白雲を見よ	三好 達治	
創作 朝草夜草	和田 伝	
少国民文化時評	周郷 博	
諺闇をした子供の現実		
大地に生きる		
子供の夢と現実		

『少国民文化』九月号

(一九四四年九月刊、第三卷第八号、通卷二七号)

提言	竹下 直之	要
少国民の臣道実践	田中 忠雄	
働きと共にある文化	山本 和夫	
創作・秋空	白鳥 省吾	
詩・君と僕とは戦友だ	久利 澄	

疎開して………日比野士朗

自然物を利用した玩具の作り方………松石治子

少国民図書紹介………

研究所

協会報

### 『少国民文化』一月号

(一九四四年一月刊、第三卷第一〇号、通巻三九号)

提言………水川清一

疎開の重大意義………大島正徳

疎開学童の新生活

学童疎開への提言

△標準語の確立

△学校への課題………高倉テル

△教師の問題………藤森成吉

△母親の場合………住井すゑ子

創作・ザボンの木………吉村敏

詩・秋の朝………村野四郎

俳句・疎開童子………室生犀星

〔現地会員調査報告〕

疎開学童生活実態調査

ドイツ学童疎開生活………武田誠吾

疎開学童生活日記………今川国民学校

大陸の子供………秋沢三郎

### 『少国民文化』二月号

(一九四四年二月刊、第三卷第一一号、通巻三〇号)

提言 鬼に金棒を………

杉靖三郎・丸本喜一・増川泰

上野謹五郎

文化創造と科学教育………

自戒一則………寺尾新

戦争・科学・航空機………山本峰雄

詩と科学………菱山修三

詩と工作………岡田哲郎

疑問は科学の母………住田正一

科学と表現………内山賢次

科学と玩具………山脇巖

科学童話 日本の御飯

科学よみものの再出発………与田準一

科学よみものの再出発………石森延男

学童疎開と文化………竹田俊男

協会特報

『少国民文学』五月号(一九四三年)少年小説特集

△卷頭言▽出発………加藤武雄

明かるい朝の道………後藤檜根

一五年戦争末期の雑誌(三)

耳……………新美 南吉

△隨筆△熱帶の木薙……………山本 和夫

△詩△ある少年に……………与田 準一

少年文学の再建……………山田 三郎

少年少説の世界と現実の世界……………川崎 大治

少年小説における指導性と文学性……………滑川 道夫

少年少女小説無力——三月号少年文学評……………百田 宗治

△新刊評論△少年小説読後ノート……………小出 正吾

昭和十七年度の少年小説は何が多く迎へられたか……………

日本少国民文化協会研究所調査  
読まれる本と読まぬ本……………日本少国民文化協会研究所調査

童話と少年小説の領域……………塙原健二郎

編集後記……………二反町幹事

『少国民文学』六月号(一九四三年)童話文学特集

△卷頭言△何故新人に至嘱するか……………小川 未明

△詩△ナセノ……………平塚 武二

ホアンのナイフ……………西山 敏夫

胸の名札……………稻葉 健吉

キリンの首はなぜ長い……………

——森の神話と寓話集より——……………シートン作

童話文学の諸問題……………光吉夏弥訳・阪本越郎

童話文学の創作心理……………座談会・波多野完治

浜田広全・塙原健二郎・川崎大治

編集者側 吉田甲子太郎、二反長半

少国民雑誌四月号作品評・童話文学の帰趨……………菅 忠道

下畠卓著「あさとひるとよる」……………波多野完治

長谷健「アサノミチ」……………岡本 良雄

山田三郎著「東の、」……………後藤 檜根

文学部会掲示板 滑川道夫著「少国民文学試論」……………波多野完治

編集後記……………二反長幹事

『少国民文学』七月号(一九四三年)報道文学特集

△卷頭言△報道文学と古典性……………吉田甲子太郎

△詩△内原訓練所……………巽 聖歌

工場の姉妹……………神崎 清

汽車開通(第一回)……………氏原 大作

△黒板童話△草神をのりこえて——、五年生の手記……………土屋由岐子

山のてっぺん……………長谷川鉄平

少国民教育文学・管見……………長谷川鉄平

江田島執筆懊惱記……………清閑寺 健

報道の苦しみ……………山本 和夫

「明かるい朝の道」と「耳」を読む……………吉田甲子太郎

少国民文学五月号作品 「明かるい朝の道」に関する一つの調査・少国民文化協会研究所

少国民図書近刊評

清閑寺健「江田島」

中村新太郎

吉村 貞司

二反長平「島の旗かぜ」

波多野完治

柏熊達生訳「森の小猿」

久米 元一

少国民雑誌五月号作品読後感

久米 元一

文学部会掲示板

編集後記

二反長幹事

株式会社

創刊ノ辞

少国民文学の行くべき道

井上 司朗

ほがひびとの歌

保田与重郎

伝統の繼承

房内 幸成

満々たる自信を以って堂々たる企画を

佐伯 郁郎

新人待望

新しき少国民文学の待望

岩崎 純孝

美しい夢をこそ

寺崎 浩

希望する新人作家

山本 和夫

少年航空兵（帰郷報告）

日比野士朗

壁董話  
勝負  
弓の字型の金具  
大和の血（詩）  
お山の杉の子（入選歌）

塙原健二郎  
小林 純一  
与田 準一  
吉田テフ子

の新人を育成する為に生れた」と書いて、「新人の原稿を募集す

る。(中略) 応募の作品は、編集部と日本少国民文化協会文学部で選ぶが、併し発表の場合は、投稿として取扱はずに寄稿としての礼儀を執るつもりである」と書いている。

なぜ、少国民文化協会文学部会機関誌『少国民文学』が一九四

一五年戦争末期の雑誌(三)

IV

三年七月号以降は休刊となり、『少国民文化』休刊の直前に、みたみ出版から、商業誌として『少国民文学』が発行できたのか、私は理解できないのである。その事情については、当時の関係者にご教示いただくとして、さしあたりは、目次を紹介しておこう。なお、本誌は創刊号だけで、二号は刊行されなかつた。

『少国民文学』創刊号、一九四四年十一月一日刊、みたみ出版

一五年戦争末期の雑誌(二)

通志出陣……………加藤 武雄

農村学童と少国民読物

朋読文学研究会報告

編集後記……………野長瀬正夫、山本和夫

右のみたみ出版版『少国民文学』のほかに、少国民文学を特集

した雑誌が二誌ある。有名なのは『国文学・解釈と鑑賞』一九四二年四月号の「少国民文学の検討特集」で、ここには与田準一が

「子供への構想」を書いている。次に、あまり知られていないのは、『文庫』誌(三笠書房刊)一九四三年九月号(第三卷第九号)

の「特集・少国民文学の課題」である。特集の部分だけを紹介しておこう。

邊境の新たなる創造……………矢崎 弾

童話文学……………板垣 直子

少国民文学への反省……………徳永 直

少国民と科学読物……………古谷 綱武

四つの論文は、どれも内容の薄いもので、ここで紹介する価値はない。少国民文化協会が作家や評論家を委嘱させた例を、ここで見ることができるのである。

あとがき

『少国民文化』の書誌学的研究については、大阪国際児童文学館の上田信道氏による日本児童文学学会一九八四年度研究発表会

創作

牛莊の町……………小出 正吾

武士のやくそく……………榎山 潤

の報告に教えられた。『少国民文化』『少国民文学』は、同館の所蔵本を利用して、この「資料」をまとめた。『新児童文化』誌や、少国民文化協会編集の本やその他の資料については、山中恒氏に教示をうけ、同氏のコレクションを利用させていただいた。

記して感謝する。